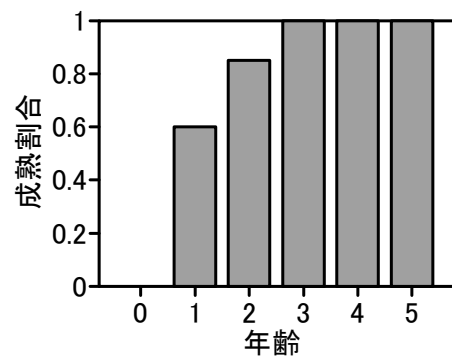
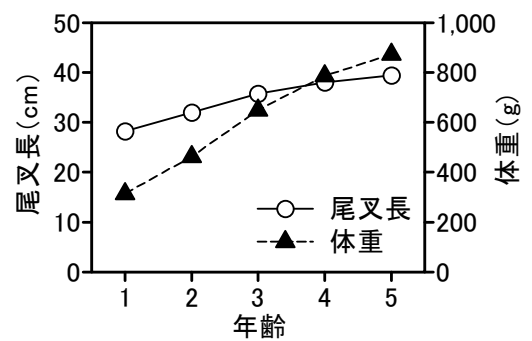
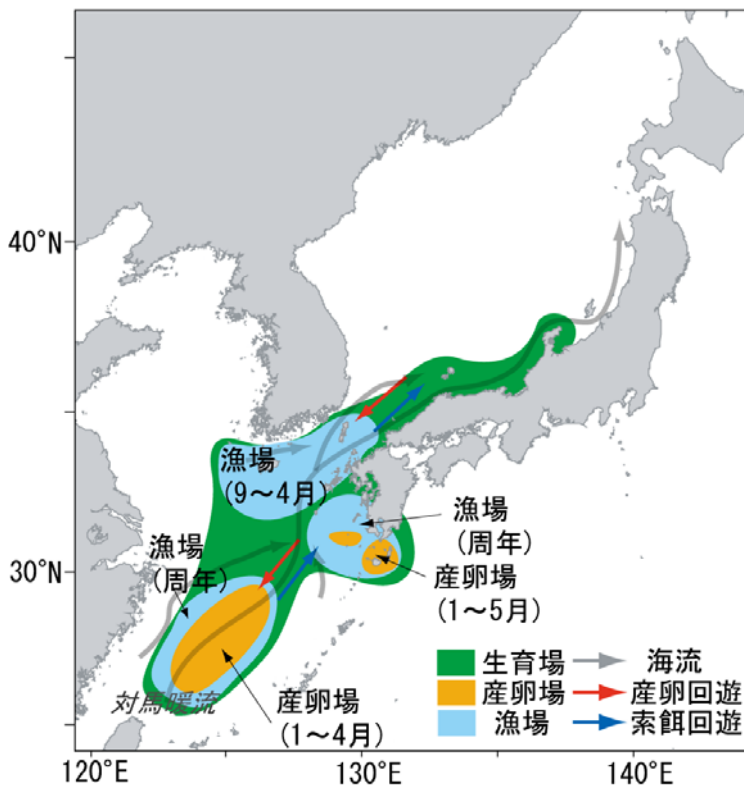




## ゴマサバ東シナ海系群 平成27年度資源評価結果

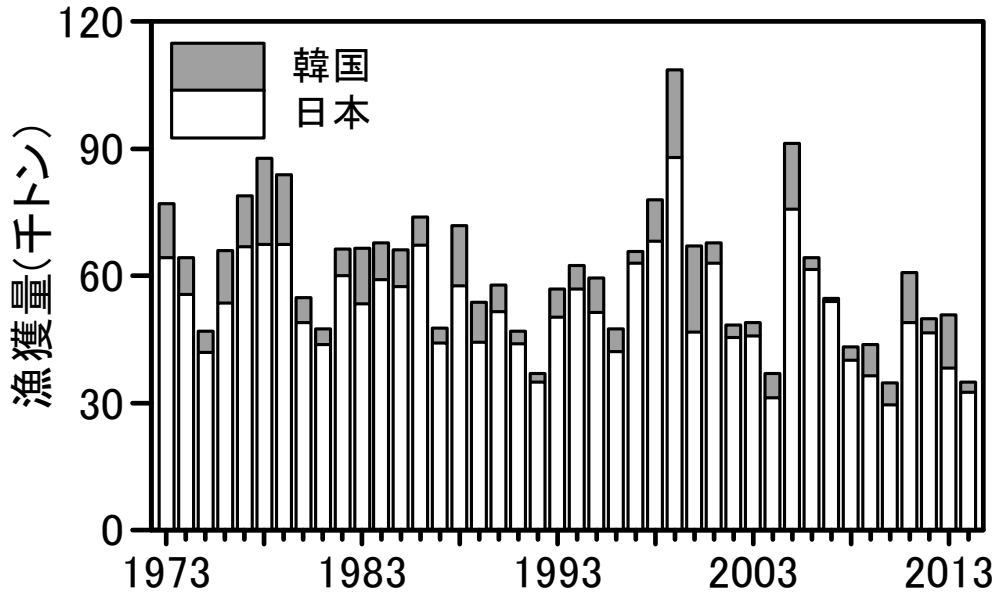
1

### 分布・成長・成熟



2

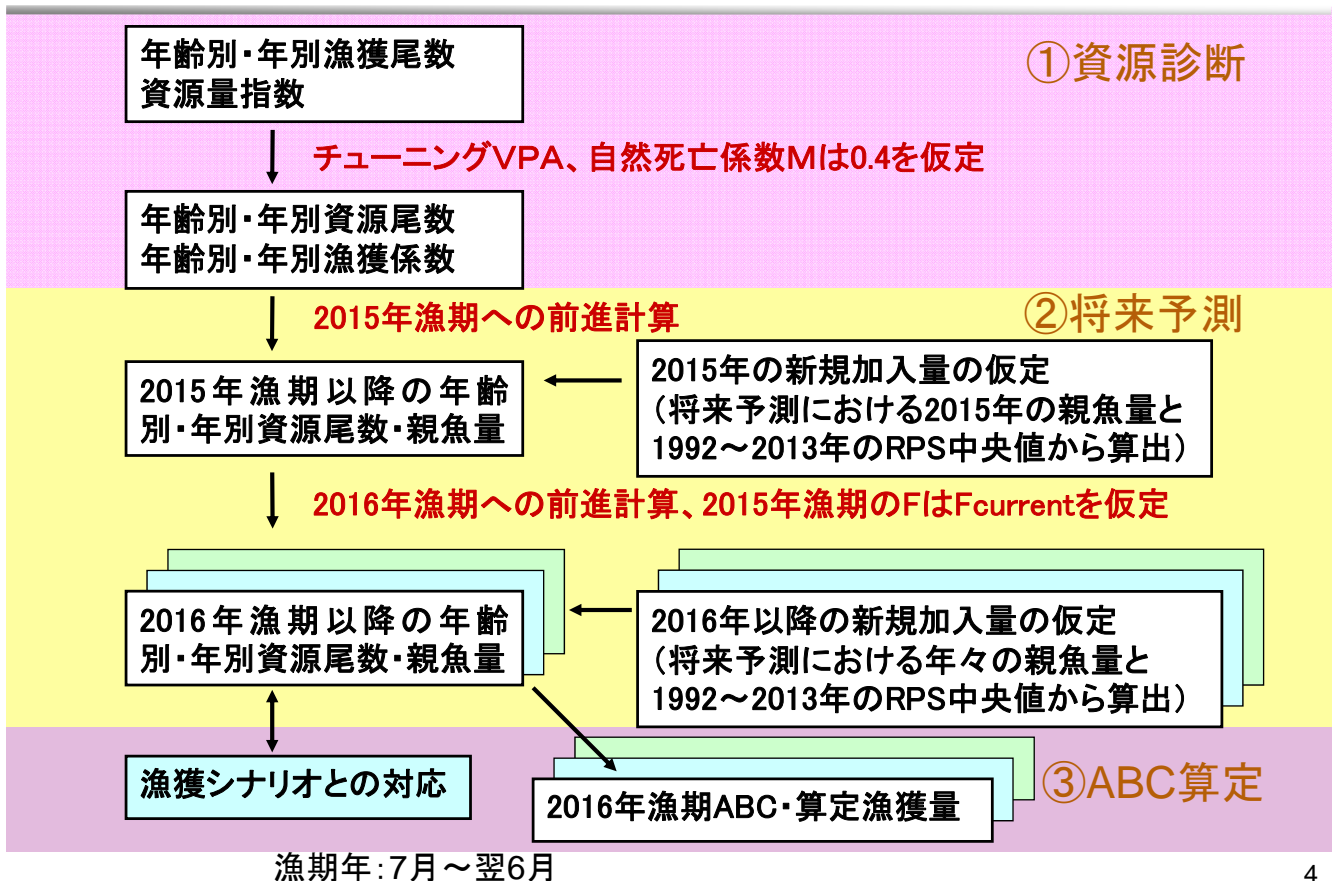
# 漁獲量の推移



- 日本の漁獲量は1970年代以降、5万トン前後で推移している
- 2012年以降減少傾向で、2014年の日本の漁獲量は33千トン

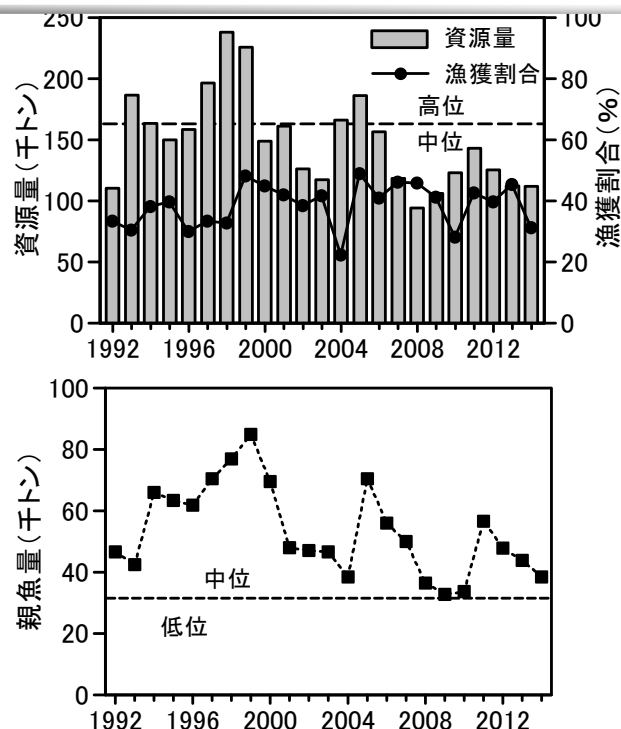
3

# 資源評価の流れ



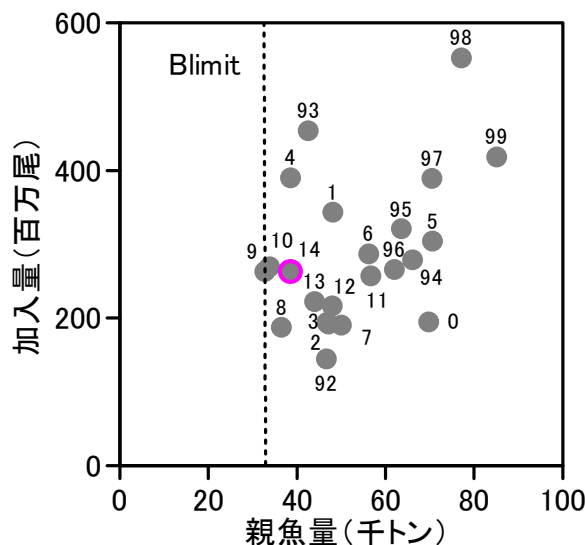
4

# 資源量・親魚量と漁獲割合の推移



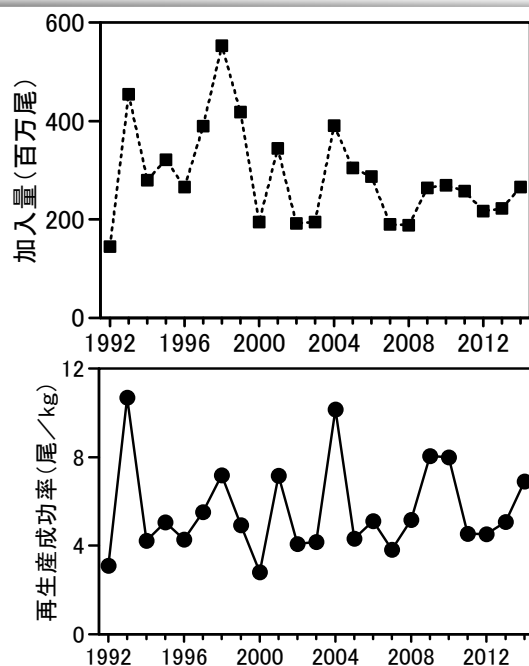
- 2014年資源量、親魚量はそれぞれ112千トン、38千トン
- 親魚量がBlimitを上回っていることから資源水準は**中位**とした
- 過去5年間(2010~2014年)において資源量は**横ばい傾向**

# 再生産関係とBlimitの設定



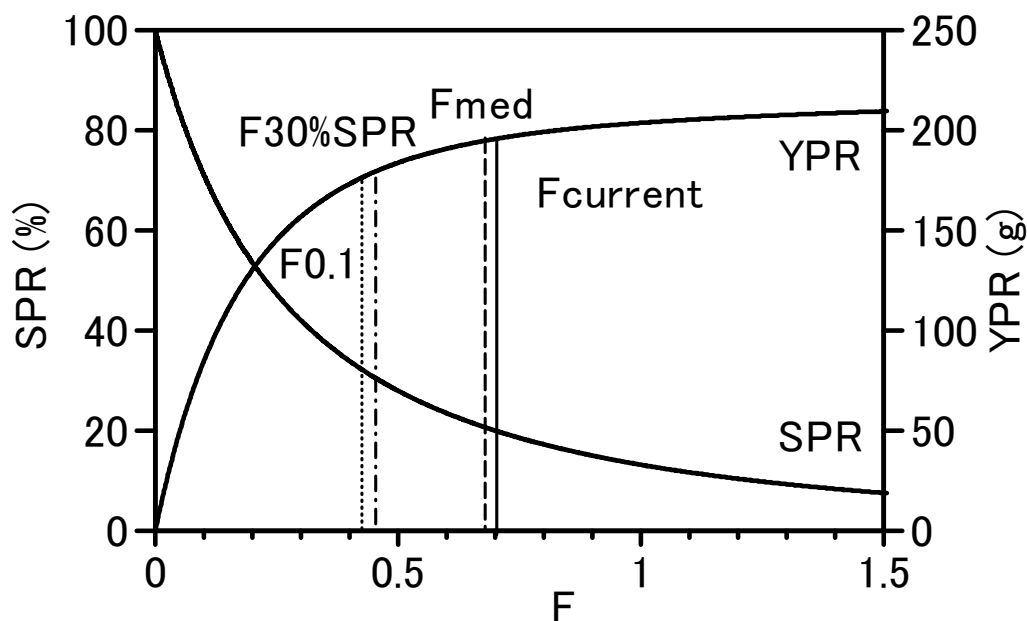
- 親魚量と加入量に正の相関
- 資源変動が比較的安定している本資源において、高い加入量を得るには、今までの最低親魚量を下回らないことが望ましい。
- Blimit = 2009年水準(33千トン)

# 加入量、再生産成功率の推移



- 加入量： 2009年以降は2.5億尾前後で安定。2014年は2.6億尾。
- 再生産成功率： 1993、2004年に高かった他は比較的安定。2014年はやや高かった。
- 将来予測における加入量は1992～2013年のRPSの中央値を仮定 <sup>7</sup>

# 生物学的管理基準と現状の漁獲圧の関係



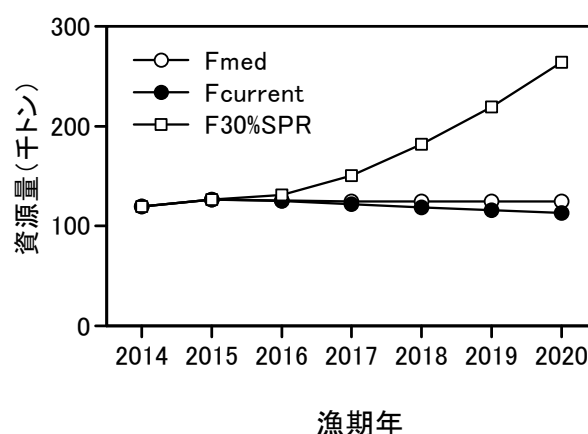
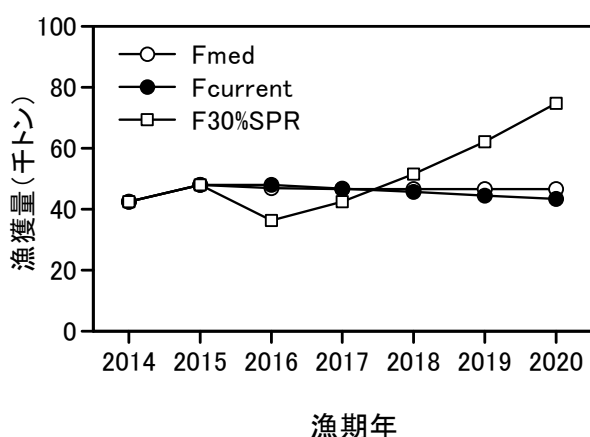
FcurrentはFmedよりもわずかに高く、F30%SPRやF0.1より高い

# 資源評価のまとめと2016年ABCの算定方法

- 資源評価のまとめ
  - 中位・横ばい (H26年度資源評価 中位・増加)
  - 2014年の親魚量(38千トン) > Blimit(33千トン)
  - $F_{30\%SPR} < F_{med} < F_{current}$
- ABC算定方法
  - 規則 1-1)-(1)
  - $F_{2015} = F_{current}(2012 \sim 2014年)$
  - 加入量 = RPS(1992~2013年の中央値) × 親魚量
- 管理基準
  - 親魚量の増大を図る  $F_{30\%SPR}$
  - 親魚量を維持する  $F_{med}$

9

## 各漁獲シナリオにおける将来予測



- $F_{30\%SPR}$ では、2016年に漁獲量が大きく減少するものの、その後の資源量の増加に伴い、漁獲量も増加に転じる。
- $F_{current}$ では資源量、漁獲量ともわずかに減少

10

# 2016年ABC

漁獲シナリオ (管理基準)	Limit / Target	F値 (Fcurrentとの 比較)	漁獲 割合 (%)	将来漁獲量 (千トン)		確率評価(%)		2016年漁期 ABC (千トン)
				5年後	5年平均	2014年親 魚量を維 持 (5年後)	Blimitを維持 (5年後)	
親魚量 の増大* (F30%SPR)	Limit	0.46 (0.65 Fcurrent)	28	39~ 102	51	100	100	36
	Target	0.37 (0.52 Fcurrent)	23	44~ 100	49	100	100	31
親魚量 の維持*(Fmed)	Limit	0.68 (0.96 Fcurrent)	37	25~ 77	48	61	76	47
	Target	0.55 (0.77 Fcurrent)	32	35~ 100	52	97	99	41
								2016年漁期 算定漁獲量
現状の漁獲圧の 維持 (Fcurrent)	Limit	0.71 (1.00 Fcurrent)	38	23~ 72	46	47	60	48
	Target	0.57 (0.80 Fcurrent)	33	32~ 93	50	92	97	42

\* を付した漁獲シナリオは中期的管理方針に合致する